
半人前魔王と召使

烏魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半人前魔王と召使

【Nコード】

N5497BA

【作者名】

鳥魚

【あらすじ】

半人前のお馬鹿な魔王のせいで仕事を失ってしまった人間が召使として雇われる話。

魔王と召使の一人称で進んでいきますが、視点がコロコロ変わりますのでご注意ください。

気づけばもう目の前に魔王城が見えている。

私はその大きく、なおかつ悪趣味な城を竜の背中から見ていた。

「すごい城」

と、思わず私は呟いてしまう。

何がすごいのかと問われたら、とにかく場所がすごいと答えるだろう。

魔王城と言うからには、暗雲立ち込める空に切りだった崖や深い森の中に建っているものと考えてしまう。

ところが空は雲ひとつなく隅々まで晴れ渡り、周囲は色とりどりの花が咲き乱れる草原、そして草原が囲うように存在する湖を背景に魔王城はそびえ建っていた。

こんな場所だ、実は魔王城も普通の城と変わりはないのでは、と考えたが違った。

壁から屋根まで黒一色。

悪魔や骸骨、あるいは邪悪な竜のような彫像は屋根や壁の至る所に配置され、不気味さを演出している。

正直、色々台無しである。

何もかも残念という言葉で片づいてしまいそうだ。

「ほほう。小娘、なかなか見る目があるようだな」

私を攫った魔族の男が僅かに感心したように言う。

別の意味で、などと言えるはずがなく、ただ黙るだけとした。

何かまずいことを言って殺されるのは勘弁したかった。

私にはしなければならぬことが沢山ある、まだ死ぬわけにはいかない。

魔族はそれ以上、その話をするのではなく緩やかに竜の高度を下げ、城へ向かった。

城の中は意外にも意外、普通の城といった様子であった。てつきり外観と同じく内観も黒一色なのかと思っていたが、傷ひとつない磨かれた象牙色の床、白い壁にアクセントのように金が散りばめられている。

教会の直線的な建築ではなく、曲線的なものであった。まさか魔族が人間の貴族達と同じような感性を持っているとは考えていなかったのである。

正直、私の中のイメージは洞穴みたいな何かに暮らしているといったものだった。

そもそもこの大陸には北半分は魔族の国、魔国が存在しており、残りの南に人間達がそれぞれ治める国々があった。

百年ほど前までは魔族と人間との戦いがあったそうだが、魔国の王こと魔王が代替わりをすると停戦を申し入れてきた。

魔族は今後人間の国に侵攻は行わないと不可侵条約を結び、魔国は魔物が人間の国に侵入することが出来ないよう魔王が厳重な結界を張り、魔国は孤立状態となったのである。

その間の百年間は何事もなく、なおかつ魔族という存在を人々の記憶から風化されていたのも原因であろう。

普通の一般人が歴史は知っていても、魔族自体をあまり知らないのは当たり前であった。

だから、私が魔族に対するイメージが曖昧なものであっても仕方がないのである。

城の中に感心したような呆れたような思いを抱きつつ、通されたのは玉座の間。

流石に玉座の間は魔王城らしく、暗い上に入口からまっすぐに紫の

絨毯がひかれている。

この城は本当に統一性がないと思いつつ、魔族は奥へと進んでいく。殺されませんようにと祈りながら同じように奥へと進んだ。

この奥に魔王がいると思うとやはり恐怖が身を包むが、生きて帰るために身体全体に力を込める。

弱さを見せれば負けだ、私はどんな手を使っても生きて帰る。

「魔王陛下、連れて参りました」

私を攫った男は恭しく礼をし、玉座から声をかかるとを待つ。

どうしていいのかわからないので、私はとりあえず俯くことにした。それを見た攫った男に睨まれたような気がするのだが、気がつかないふりをする。

「ご苦労、將軍。娘、おもてを上げよ」

言われて顔を上げると、そこには紺色の髪に切れ長の紫の瞳、魔族特有の少し尖った耳を持つ青年くらいの男が立っていた。

『青年くらい』というのは魔族は長寿だと聞く。

下手に判断して五百歳くらいだったと言われても困るので、とりあえず『青年くらい』に留めておいた方が良かったろう。

話を戻して、青年くらいの男は顔は整っている。

だが、人間だろうが魔族だろうが顔なんぞに微塵も興味がなかった。あるのはここから生きて帰れるかということだけだ。

「確かにシエルキラ姫に良く似ている。將軍、でかしたぞ！」

最初はクールに笑っていたが、やがて嬉しさを抑えきれなかったような無邪気な笑みを浮かべる魔王。

魔王というと邪悪な威厳さというイメージがあったからちょっと意外な光景ではあった。

まあ、それは今は置いておく。

「陛下のご意向に添えられたのならば宜しゅうございました」

將軍と呼ばれていた私を攫った男は事も無げに一礼をとる。

全然宜しゅうじゃないと心の中で呟く。

奴らの態度一つ一つが私は気に入らない。まったく気に入らないが、

魔王から何か新しい情報が出ないかと次の言葉を待つ。

この魔王はなんとなくだが少し頭が弱そうな気がしてきたからだ。何かぼろりと零すかもしれないと思っっている矢先だった。

「これで余の夢の『シエルキラ姫そっくりさんはーれむ』をつくる
ことが出来るのだな！」

……は？ 今なんて言った？

一瞬で頭の中が凍りつく。

この馬鹿は何を言い出したというのだ。

そもそもここ数年魔族が侵略というわけではないが、国境あたりで人間を襲う魔物が多くなってきた。幸いにも死者は出ていないらしいが、それでも重傷者が数名出ているという。

各国は魔族の挑発かと噂され、魔族への抗議のために魔国へ勇者を遣わしたという。

まさかそんな下らない理由で襲っていたのではないだろうかと、得も言えぬ怒りに身体が震え出す。

「左様、陛下のために新たに娘を連れてくる所存です」

「うむ、任せたぞ」

さらに娘を連れてくるというのか。

こんなはた迷惑なことをしてかしておいて、脳天気な魔王とはなんと愚かなのか。

心に怒りの炎が轟々と音を立てて燃えあがる。

気がつけば私は思わず声を上げていた。

* * * * *

余は今まで他の国に行った事がなかった。

我が魔国は百年ほど昔、余の父によって他国との外交および貿易を一切禁じ、更に魔族が触れたら死ぬような結界を張ってしまったのである。

余は人間達の暮らす国に憧れていたが、そんな結界が存在する限りいけるはずがない。

そのため幼い頃から密かな楽しみとして水晶を通して人の国を見ることが多かった。

父上が亡くなり一応魔王となったが、その趣味は今でも変わることはない。

そんなある日のこと。

一人の少女を見つけた。

波打った金色の髪はまるで小麦が風に揺られては輝くようで、サファイアのような青い瞳は儂げに伏せられている。

白い肌はみるからに滑らかで、唇は果実のように瑞々しそうだった。その容姿は余の心を射抜くのは簡単だった。

調べれば彼の少女はシュベリト王国の姫君シエルキラ。

彼女と話したい、そう願ったりもしたが、余は一応魔王。

人間の姫君に会えるはずもなかった。

ましてや結婚など夢のまた夢。

落胆していた余に宰相は言った。

『姫はだめですけど、一般人でそっくりさんくらいなら良いのでは？』

連れてきなさいな、と諭された。

父上が亡くなったせいかわ、徐々に弱まり始めた結界の抜け道を利用して、早速行動に移したのだが……。

「何馬鹿のことを言っている、クソエロ魔王」

お願い！燃やされたほうがましとか言わないで！

シエルキラ姫にそっくりさんの丸焼きなんて余は見たくないぞ！

「ま、まて、二人とも！ 少し落ち着いて……」

「フン！ ならばここで死ね！」

余の話を一言も耳に入れる気がない將軍は、そう言つと魔劍は負けん……ええい、もう面倒だから魔けんでいいや！

とにかく魔けんを城の床に突き刺す。

魔けんを突き刺した場所から蒼い炎が噴き出ると、娘に向かい一直線に向かつていった。

「い、いかんっ！」

余も急いで娘のために防御陣を張ろうとするも、將軍の方が早かった。

炎はあつという間に娘の周りに円を描き、蒼から紅蓮へと色を変え、娘の背丈を越えては威力を高めていく。

「くっ……」

熱さのせいか恐怖のせいか、娘は床に両膝をついてしまう。

その姿がなんとも哀れで、余も何とか炎を打ち消そうとするも流石は魔けん。

余よりも魔力が高いと言われているだけあつて、まったく邪魔できない。

そうしている間にもじりじりと円を縮小させ、娘の身動きを封じ込める將軍。

「終わりだ！」

「將軍……」

將軍が残虐な笑みを浮かべて、床から魔けんを抜き取る。

すると炎は娘に集約し、娘はあつという間に炎に包まれてしまった。

……ああ、なんてことだ。

死ぬ、けど、こんな所で死にたくない。

今まで必死に働き生きてきた、働けるならばどんなことでもやった。すべてはお金を手に入れるため。

紅蓮の炎が眼前に迫り、身構えるもあまりの熱さに汗が留まることなく流れ落ちる。鼓動は異常なほど早く、逃げ道を探そうと見回すもない。

起死回生は望めないかもしれない。

あまりの熱さに足からは力が抜け、床に膝をつく。だが、諦めることはしたくはなかった。

迫り来る炎からは目を逸らすことはしない。

眼の前で炎が揺らめくその向こうで、あの私を攫った男が嘲笑うように立っていた。

こんな所に連れてこられた挙げ句、ましてや死ぬなど到底許容できるものではない。

そうだ、こんなところで死んでたまるものか。

気がつけば炎は止み、眼の前には驚愕の表情の男と安堵したような魔王がいた。

私はゆっくりと立ち上がり、自らの出で立ちを見た。

新しく働き始めた館のお仕着せは炎で焼けて煤だらけだった。

せっかく羽振りのいい仕事であったのに、珍しく環境も整った職場だった。

私はあんな風に扱われることのない仕事に初めて就けたことを、密かに喜んでいた。あんな惨めな暮らしから抜け出せたと思っていたのに。

いきなり消えたとあれば、戻っても仕事などなくなっているに違いない。そもそも、もうあの館に戻るはずがない。

次に背中まであったはずの緩やかなウェーブのかかった金色の髪は短くなっている。しかもサラサラストレート。あつ、良く見たら金色の何かが衣服と一緒に床に落ちてる。

トドメはナイチチ。

さっきまでは程々にあった胸は驚くほど平らになっていたため、余は驚きを隠せなかった。

あれ、胸どこにいつちやったの？

というか、服の下に服ってどういうこと？

混乱の絶頂にいる余よりも早くに冷静さを取り戻したのは將軍だった。

「まさか男とは」

將軍の言葉で我に返る、いや、返りたくはないというか更に混乱する。

娘が男？ いや、男が娘？

いや、いま目の前にいるのは顔は女の子みたいな男子。

余にはもう何がなにやら理解できない。

「私の堪忍袋も緒が切れた」

そう言つて娘、じゃなくて少年と青年の間のえーっと、オ、オカマ君は懐からナイフとフォークを取り出す。

ナイフとフォークは食事の際に使う至つて普通のナイフとフォーク。と思いきや、よくよく見るとナイフとフォークは普通のものよりも尖っており、心なしか攻撃力が高まっていそうな気がする。

それをどうするつもりなのかと思つていると、オカマ君はそれを將軍目掛けて投げつけたのである。

キラリと白銀の光を放つナイフとフォークは將軍目掛けてまっしぐら。

しかし、將軍も負けてはいない。

フォークとナイフを魔けんで弾き飛ばし、間合いを取る。

もう何が何やらわからないけど、なかなか見応えのある戦いになるやもしれんと椅子から身を乗り出すように二人を見守る。

「小賢しい真似を」

と、睨みつける將軍。

オカマ君は何も言わず、空色の双眸で鋭く將軍を観察しているようだ。

次に動いたのは將軍だった。

「はっ！」

まずは魔けんから炎を放ち、オカマ君の目の前に炎が広がる。

將軍は炎の術がお好きなようだがワンパターンだなとも思う。まあ、猪突猛進な將軍だから仕方があるまい。

「くっ」

オカマ君は一瞬、足元で燃え上がる炎に気を取られてしまう。

將軍はその隙を見逃さず、一気に間合いを詰めてはオカマ君の心臓目掛けて魔けんを突く。

だが、これはオカマ君の作戦だったらしい。

寸での所でオカマ君が華麗に避けるが、ただ避けるだけではなかった。

どこから取り出したのか、避け様に垂直に立てるように持った丸型の銀トレイを思いつき將軍の脳天にチョップのように叩きつける。まさに神業のようであった！

「ぐっ！」

あれは結構くるだろうなあと頭を押さえて床に片膝をつく將軍。

さらに頭に先ほどと同じように、止めと言わんばかりにトレイを叩きつけるオカマ君。

まずい……將軍がオカマ君にやられるかもしれない。

魔国一の騎士である將軍がオカマにやられるなんて国中に噂が広がれば、下がりにつながっている余の評価ももはや内乱を起こしかねないほどになるかもしれない。

だが、余の予想に反して、オカマ君はその場に崩れ落ちた將軍に何

もしないで、冷たく一瞥しただけだった。

「世の中、あんたみたいに遊んで暮らせる人間も入れば」
オカマ君が余を見上げる。

玉座は少し高い位置にあるので、自然と見上げる形になってしまっ
のだ。

空色の瞳がガラス玉のようで綺麗だなあと思いつつ、オカマ君が歩
み始める。

「私みたいにががむしやらに、なりふり構わず働かなきゃならない
者もいる」

余はあまり肉体労働とかしたことないからわからないが、オカマ君
の言葉からきつと何か事情があることが窺える。

「陛下……くっ！」
さすが將軍。

もう復活したかと思いきや、オカマ君を止めようとするが、ナイ
フが足元に何本も飛んできたため阻まれる結果となった。

オカマ君はというと將軍など目に入っていない様子で、双眸を険し
くして余を見ていた。

こういうと誤解を受けそうだが、顔は女の子みだいだからちよつと
ドキツとしちゃう。

何て、余裕ぶっこいてたからだろう。

「……私のお給金返せコノヤロウ！」

ぶんつと音を立ててオカマ君が何かを投げる。

それが何かと確認する前に、それは見事に余の顔にクリーンヒット！
視界が銀色に輝くそれで一杯なのを最後に、余は情けなくも意識を
失ったのである。

「いやはや、まさか陛下がこれほどお馬鹿さんだったとは存じませんでした」

そう言ったのは魔国の宰相を名乗る、見た目は十過ぎたくらいの黒髪の少女であった。

怒りに任せて銀のトレーを魔王に投げつけた後、すぐに現れたのはこの宰相さんだったのである。

ナントカ將軍とやらに事の詳細を聞き、合点がいったようにニコニコと微笑んでは気絶している魔王を起こしたのである。……電気ショックで。

あれはちよつと痛そうだ。

そして今現在、場所を移して魔王への説教となっていたのである。ちなみに何とか將軍はこの宰相さんにより部屋から追い出された。しばらくは部屋の前で何やら騒ぎ立てていたが宰相さんが部屋から出て、何か話した後に去ったようだ。

「私はあくまで『連れて』と言いましたよね、誰も『攫う』などと言った覚えはありませんが」

「うう、だってえ」

「だってもクソもありません。陛下のお馬鹿さん加減は好きですが、時と場合を考えてください」

ここは魔王の執務室の隣にある魔王の私室。

魔王の私室と言うからにはあの玉座みたいに暗くおどろおどろしい部屋かと思っていたが、意外にも日差しが差し込む明るい部屋だった。

柱や家具などに植物や花をモチーフにした曲線的な意匠が施されている上、アクセントとして花の意匠の所々に金が使われている。

豪華であり華美な部屋だが、下品ではない。

そこは今まで私が見てきたどんな世界よりも違うと思った。

私は部屋のある長椅子の真ん中に不似合いながらも腰掛けていたが、込み上げる黒いものを押し留めるためにそれらから視線を外して前を見た。

そこにはうんうん唸る魔王がいた、長椅子の上で顔を押しさえ横になっっている。

「リオさん、申し訳ありませんね。陛下のせいでお仕事まで失われたとか」

申し訳なさそうに謝る宰相に、部屋に気を取られていた私は我に返る。

私情を挟んでここが魔国ということを失念していた己の迂闊さを呪い、今日から私の名はリオだと己に戒める。

リオとは私の本名ではないが、如何せん相手は魔族。本名を名乗る気になれなかった。

「いえ、お気になさらないください」

また仕事探すしかないと心の中で付け加えるが、果たしてあれくらい好条件の仕事が見つかるかはわからなかった。

そもそもここから帰られるかという疑問もある。

「あいたた……」

魔王がむくりと起き上がり、長椅子の中心に座り直す。

そしてなぜか私をじっと見つめては深いため息をついた。

「うう、可愛い顔してオカマとは」

私は黙れと言わんばかりに睨む。

魔王は私が睨んだことなど気がついていないようで、再びため息をついては何か思い出したように顔を上げた。

怒りに任せて投げつけたトレーは見事なまでに魔王の顔を赤くさせ、なんとも面白い顔にしてくれたことだけが私の気持ちをスカッとさせてくれる。

「そういえばリオとやら、そなた、どうして女装などするのだ？」

魔王は興味津々と言わんばかりに私を見る。

詳しいことを話す気にはならないが、一応は答えておこう。

「一言で言えば、仕事を多く得るためです」

「……へ？」

目を点にする魔王。

「私はこの顔でしょう？ 男の仕事も出来、尚且つバレなければ女の仕事も出来る。一石二鳥でしょう？」

なんとも言い難いような顔で魔王は宰相さんに目配せしていたが、宰相さんは特に気にした様子もなく相槌を打つ。

「仕事のためなのか？」

「ええ、私は仕事以外にそんなことをする必要を感じられません」

「そ、そうか。では今回はその、女装をしてなんの仕事をしていたのだ？」

「ああ、とある館の召使として働いていましたが、今回のことでクビは確定でしょう」

「……そうか。ついでになんであのお仕着せの下に男物を着込むことが出来たのだ？」

「それは秘密です」

それは私の得意技だから教えることは出来ない。

「……そ、そうか」

魔王もあまり追及する気にはなれなかったようでそれ以降特に話そうとしなかった。

部屋に妙な沈黙が流れる。

私から話す気はないが、この微妙な空気を私が作り出してしまったようで心なしか気まずい。

そんな中、宰相さんが口を開いた。

「リオさんは、お金さえあればどんなことでも引き受けて下さるのですか？」

突然の問いであった。

「一応は……」

「なるほど」

何か納得したように宰相さんはにこやかに、しかし何気なく魔王の肩を叩く。

「では、陛下の召使いとして雇われては下さいませんか？」
はい？

「どういうことでしょうか？」

「あなたの仕事を奪ってしまったのはこのお馬鹿陛下です。ならば、その責任を取るのは陛下です。それに陛下の身の回りの世話をする方がいないので丁度いいですし」

ねえ？と同意を求める宰相さんに魔王は目をぱちくりと瞬かせて、言われたことを呑み込めきれずと「う？」とか「へ？」を何度も繰り返す。

私自身色々突っ込みたいことが多いが、口には出さない。

「それにこの方ならば陛下の大好きなシエルキラ姫のそっくりさんにもなれますし、何よりリオさんの素質は素晴らしい」
素質？

一体なんの話だろう。

私が首を傾げて宰相さんを見ると、宰相は事もなげにさりりと言い放つ。

「リオさんは魔術が効かない体質の方のようです」

魔術か効かない？

そんな話は初耳だった。

「ああ！ だからさつき將軍の魔剣の攻撃も効かなかったのか！」
ぽんつと手の平を軽く打つ魔王。

あんな炎が迫ってきていて怪我がなかったことについて不思議に思っ
てはいたが、あのナントカ將軍の魔術が下手くそというわけではなく、私の体質だったらしい。

「魔術が効かない人間がいるとなると、余達には厄介な存在であるな」

魔王は私を真正面で捉えては「むむむっ」と真剣な表情で唸るが、

私にはふざけているようにしか映らないのが不思議であった。

「そうですね、ですから私はけんきゅ……じゃなくて、我々のために協力をして頂きたいと思ひまして」

にこやかに微笑みながら心なしか研究と言いかけた宰相さんに、私は思わず身構える。

やはり相手は魔族、宰相さんも危険だ。

「言っておきますが私は引き受けませんよ、実験動物になんかなりたくないです」

「だめですか」

「嫌です」

実験動物というところは否定しないのかと思いつつ、きっぱりと断る。

それでも宰相さんはあの笑みを引つ込めずに続けた。

「もちろんこちらとしてはただ働きなんてことは言いません、陛下のポケットマネーから出します」

「えっ!?! 余の財布から?」

「当たり前です。ちなみに金額は月30万マール、さらに豪華な個室付きです」

「いかがでしょう?」と小首を傾げて訊ねる宰相さん。

前の仕事もお給金は良かったが、30万マール。五年くらいは贅沢をしながら暮らせそうな金額である。

心が揺らぐ。

神に背き魔族に魂を売るような行為だと人々に罵られ軽蔑されようとも、私はのどから手が出るほど欲しい。

その反面これは何か裏がある、罠かもしれないと思う心があるのも確かだった。下手したら殺される可能性だってある。

だけど、せめてひと月分だけでも手に入れば……そう、それだけでもかなりの大金だ。

「やります」

金に汚いと思われても構わない。

事実、私には金さえあれば何でもいいのだから。

「それは、良かった」

「余は良くないぞ……」

宰相さんは嬉しそうに目を細め、一方の魔王は恨めしそうに宰相さんを見ていたが諦めたようだ。

「うう、仕方ない」

「じゃあ陛下、早速リオさんをお部屋にご案内して下さい」

「えええええ！？ どこに案内すれば……」

「陛下の隣の部屋が空いているでしょう？ あそこにも案内してください」

私は仕事に戻りますとだけ言い残し、宰相さんはすぐさま去ってしまふ。

残されたのは言わずもがな私と魔王。

魔王は気まずそうに私を見ては、深いため息をついた。

まあ、魔王からしたら散々な一日であったのであろう、同情なんてものはしないが。

それよりも私の方が散々だった。仕事を奪われた上、とんだ勘違いをされたのだから。

なぜオカマ、いや男に勘違いされてしまったのか。

私は女である。

ただ暮らしていくには男らしく、いや本当の男のように振る舞わなければならなかっただけだ。

私はブツブツと何か呟いている魔王を無視し、再び部屋の中を見回していた。

煌びやかな部屋に金持ちというのはこんなにも恵まれているのかと改めて自分の住む世界が違いすぎることを実感させられる。

……今日は何を考えてもマイナス方向に考えてしまふ日なのかもしれない。

きつと疲れているのだ。

「うう、リオよ、これから部屋に案内しよう」

魔王の打診は考えを断ち切るためには丁度良いタイミングであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5497ba/>

半人前魔王と召使

2012年1月15日00時52分発行